

竹村家の三女、かくまわれた穴蔵までお握りを運んでくれた少女が成人して、のちに私の妻となり、女兒を二人育ててくれ、さらに孫も二人できて、今みんな近所で暮らしている。平和の有り難さを人一倍痛感している。将来の平和を希求してやまない次第である。

赤い夕日に思いを沈めて！

千葉県 並木 公子

連日のニュースが過去の歴史問題に絡み、中国、韓国の反日行動に及ぶとき、彼の地で生まれ幼少時を過ごした私の胸は、殊更に痛みます。

父蘆田養蔵は、日清戦争のあった明治二十七年（一八九四）年に秋田県山本郡に生まれ、秋田師範学校を卒業後、数年間秋田市の小学校で教鞭を執っていました。かねてから満州に深い関心を寄せていましたが、以前に渡満していた先輩に誘われるままに、大正の末期に満鉄経営の小学校に転職しました。

私が生まれた大石橋の小学校には、十年近くも勤務していて、校長になりました。校長になってからは異動が頻繁となり、安東（丹東）、奉天（瀋陽）、新京（長春）と矢継ぎ早に移り、その後学校経営が満鉄から離れたのを機に、在満日本大使館

総務部で主席視学官を勤めました。

元々、体は丈夫で病気一つしたことのない人でしたが、役職柄、視察とか講演とかで出張が多く、加えて昭和十四（一九三九）年春の全満の学校長クラスの大異動に関わって過労が重なり、出張中に脳出血で倒れ、四十五歳の生涯を終えました。このとき、母ツサは四十歳でした。母の話によると、幾晩も徹夜の日が続いていたとのことでした。

父の死によって、女学校を出たばかりの長姉を頭に、学齢前の弟までの大勢の子供を抱えて、これからどう生きていくかが大きな問題となり、親せきとか父の親友の方とかから親切にいろいろな意見を頂きましたが、母はこのまま満州にとどまり、子育てと生活とが両立できる道を選びました。

二カ月後には新京から大連に居を移し、母は通いで大連の昭和高等女学校の女子寮の賄いの仕事を始めましたが、そのうちにやや広い家を購入して光風寮と名付けて、男子寮の経営に取り組みました。最初は、南満工専や技術員育成所の生徒で

占めていましたが、そのうちに食糧事情、燃料事情の悪化に伴って、それらを補充するという条件で、ガス会社の独身社員の寮となりました。

次姉は、東京の栄養学校を出た栄養士で、大連市役所の栄養改善課で、虚弱児を対象とした学校給食の献立作りを担当していましたが、寮生が増えて母一人では大変になってきましたので、役所を辞めて母の片腕として働くことになりました。

最初のころは三食白米のご飯でしたが、次第に大豆類が混じるようになり、果てには高粱、粟までも入れざるを得なくなりました。食べ盛りの寮生に公平に分けられるようにと、井を一つずつ計っては盛付けをしていた姉の姿は、今でもはつきりと覚えていきます。

昭和十六年十二月八日、米英との戦争が始まるのと、「大変だ！ 戦争が始まった！」と担任の先生が叫びながら私たちの教室に入って来ました。それまで「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」から始まる国語の教科書が「ススメ、ススメ、ヘイタ

イススメ」になり、「木口小平は、死んでもラップを、口から放しませんでした」となると、その話に感動し、旅順港における広瀬中佐の行動を讃える唱歌をよく歌いました。音楽では「ドレミファソラシド」が「ハニホヘトイロハ」に代わり、妙な違和感にさいなまれていました。その一方では、「寒い北風」や「たかあしおどり」などの満州独特の唱歌もよく歌ったことを、懐かしく思い出します。

当時は修身という科目も重視されていて、大きくなったら男は軍人に、女は軍国の母になることが立派な日本人であることを教えられていました。四大節の式では、御真影は紫の幕で覆われていて、内幕が開かれると教頭先生の「最敬礼」という号令によって頭を下げ、「直れ」という号令がかかるまで頭を上げられませんでした。朝礼では毎朝、宮城遥拝で東京の方に向けて最敬礼をしました。天敵寒の中、全校生徒が忠霊塔を参拝しました。天皇陛下を口にするときには必ず直立不動の姿勢を

とり、新聞・雑誌に陛下のお写真があると粗末に扱ってはならず、必ず切り抜いて学校に持って来るように教えられました。

戦争が進んできた昭和十八、九年になると、皇民教育はさらにエスカレートして、三、四年生にまで教育勅語の暗誦と全文の書取りを課せられ、さらにそれができると軍人勅諭の暗誦もさせられました。中国語の勉強も増えました。登下校時には防空頭巾は片時も手放せず、そこに血液型を記入した名札を縫いつけていました。救急袋も肩から下げて、包帯の巻き方、副木の使い方までも訓練させられました。まるで幼い看護婦さんのようでした。鉄製品はすべて供出し、校庭一面に干した玉蜀黍は、前線に送るためのものです。またヒマシ油の種も植えました。どんなことでも、すべては戦争に勝つためで一生涯命でしたが、一つだけ組全員で道路の馬糞拾いをさせられたときは、何でこんなことまでさせられるのかと、子供心にも多少の反感を覚えたことがありました。

当時は、八紘一宇の精神が盛んに唱えられていて、人種差別などあってはならぬことと強く言われていました。現実には人種差別が因となるはじめは、小学校にまで及んでいました。私のクラスにも中国人、朝鮮人が一人ずついました。中国人はとても利発で、みんなの中に溶け込んでいましたが、朝鮮の人はやや人になじまない性格でした。あるとき、日本語の発音がおかしいということから、男の子にひどく揶揄やぶされました。普段はおとなしい子でしたが、このときばかりは顔を真っ赤にして抗議をしていました。たしか金さんという人でしたが、彼女のこのときの叫びは今も心に痛く痛く残っています。

家では、私と弟は母たちを困らせないように、地下室から三階までと玄関の掃除を骨身惜しまずにやっていました。母に褒められることが喜びでした。その後は、書棚に囲まれた八畳間で読書ばかりしていました。私は四年生のころには、小学生全集は全部読み終わり、父の残した徳富蘆花全

集やトルストイの「魂の書」という分厚い本を手にして、震えながら読んでいました。

女学生だった三番目の姉が、歌の好きな友人と二人で、私や弟を連れてときどき緑山で遊んでくれました。ある日、中国人の痴漢に襲われそうになり慌てて逃げ帰りましたが、それ以来山に遊びに行くのは止めました。

戦地の兵隊さんには慰問袋を定期的に送り、私たちは食べたこともない乾燥バナナも袋に入れて、「銃後の私たちも一生懸命です。兵隊さんも頑張ってください！」という手紙も必ず添えました。

召集令状がきた人を送るときは、日の丸の旗に「必勝」の字を書き、晒木綿の腹巻に千人針を作って贈り、武運長久を祈りました。そして、隣組や知り合いの人々は、日の丸の小旗を振って「万歳！ 万歳！」と叫んで送り出しました。ある日、以前寮にいた人が軍刀を腰に下げて、「これから戦地に参ります」と挨拶に来られたときは、誇らしさと悲しさが入り交じった複雑な気持ちになり

ました。それから間もなくして、その人の戦死の公報があったと、母から兄への手紙に書いてあったそうです。

昭和二十年八月十五日、戦争は雑音の多い玉音放送で終わりとなりました。東京の大空襲、沖縄の玉砕、広島への原爆投下など、忌まわしいニュースが次々と報じられていましたので、子供心にもこうなることは察していました。しかし、終戦一週間前に日ソ中立条約を一方的に破り、あつとつという間に全満州を占拠したソ連軍によって、在満日本人が大変な苦難の道を歩まされるとは、全く予想できませんでした。

終戦後一週間ぐらいは、現地の中国人は様子うかがうようにじつとしていました。やがて今まで垢で光っているような服を着ていた人々が、立派な服に着替えて街を我が者顔のようにして歩くようになってきました。戦に勝って一等国になった国民は、服装もそれ相応にということでしょう。それにひきかえ、北満各地の開拓団から命

からがら南下して来た人の中には、着る物が無く麻袋をそのまま身にまとっている人もいました。

学校の行き帰りに、中国人の子供たちが私たちに向かって石を投げるようになりました。学校そのものが中国人のものと交換させられて、私たち日本人の生徒は机のない教室で、家からみかん箱などを持ち寄って、その上で勉強していました。

夜になると、中国人の暴動に備えました。「わあ！」という大勢の人の叫び声が聞こえると、一軒の家が襲われて、めぼしい家具などはほとんど略奪されてしまいました。毎晩服を着て雑のうを肩に掛け、そして靴を履いたまま寝る有様でした。

ソ連兵に追われて、北から南からと多くの人々が大連に集まって来ました。我が家にも旧知の人が何人か訪れましたが、その中には他に行くあてのない人もいて、しばらく我が家に身を寄せる人もいました。また反対に「招かれざる客」の訪問も受けました。強奪した時計をいくつも腕に巻きつけているソ連兵や、生の塩鯖を歩きながら食べ

るソ連兵。悪い評判をたくさん聞いていただけに、最も来てもらいたくないお客さんだったので、ある日のこと、その招かれざる客がやって来ました。中国人の通訳を連れて二人組でした。私は姉たちと一緒に、予め準備してあった非常の際に逃げ込む倉庫に隠れましたが、氣丈夫な母は一人で応対して家中を案内しました。小学二年生の弟が、母を氣遣ってそばにずっとついていました。やがて二人組は、生前父が大事にしていた金の懐中時計をはじめ、腕時計など数点を「ダワイ！　ダワイ！」と言って持ち去りました。どうやら、接收する家の下調べに来たようでした。

学校では、全校生徒が大広場に集められて「スターリン万歳！」を唱えさせられました。受け持ちの若い先生の目から、つうと涙が流れ出ていました。終戦の一週間前に、火事場泥棒的に満州を占拠した狡猾な敵の首相への万歳を、何で唱えさせるのかと思うとき、先生の涙の意味を思い、口惜しさと怒りが込み上げてきました。

終戦直後のいろいろな報道記事を、奥の小さな部屋でうめきながら読んで時を過ごしました。日が経つにつれて日常生活も大変になり、いわゆる竹の子生活をする人が多くなりました。私も同級生と一緒に、道端にハンカチや小物を並べて売ったことがありました。並べたすべての品物を「イモーチェン（十銭）！」とからかわれても、上手に返事ができません。しかし、生きていくためには致し方ないことと割り切ったつもりでしたが、結局は売り子になりることができずに、ほとんど売れませんでした。

母は、秋田女子師範の同級生の指川さんのお世話で、巻き寿司を作っては市場に売りに行きましたが、やがて材料が無くなり代わりに煮豆を作り、それを私が市場で売り子になって売りました。やがて大きな家は接收されることになり、大広場前の小さなアパートに引越しました。家族一同食べていくためには、大人も子供も働かなければなりません。次姉は白系ロシア人経営のモスクワ

会社に、女学生の姉はやはり同じく白系ロシア人経営の魚網工廠で糸を撚る力仕事をしました。小学生の私は、糸を編む竹針に糸をかける仕事、留守家族の長姉は幼児二人を連れて網を編む仕事をしました。幼児二人は、何もない託児室で一日中母親の戻って来るのを待っていました。よちよち歩きの女の子は可愛い首をかしげて、「オナークガスイター」と「モットチョーダイ」を繰り返して言っていました。やつとしゃべれるようになったばかりの児からこんな言葉を聞かされると、かわいそうで何もしてあげられない自分がとても情けなく思えました。そのときの給料の額は忘れてしまいました。ソ連軍の軍票で受け取っていました。

当時の食べ物、カンコロ餅（甘藷の粉で作った蒸しパン）、餅子（玉蜀黍の粉のパン）などで、虫食いの乾パン十二個が一食分にまでなりました。入浴は月一回、二回入れれば上等でした。入浴といえば、終戦直後水が無くて中国人街に買いに行

かなければならないときがあり、重いバケツを天秤棒で担いで水を運び、風呂を沸かしてくれた母がいつも思い出されます。当時、カトリック教会が井戸水を近所の家々に分けてくれたことがあり、尼さんたちの笑顔がまぶしかったことも思い出します。

内地にいつ帰れるか分からない不安の中で、「コックリさん」という占いがはまりました。早い時期に帰れるという話は、「うそ！ うそ！」と出ていました。後に振り返って思うと、「アキ」という答えが最も近かったようです。

秋も深まり、二度目の正月を迎える覚悟をしていたところ、十二月になるといううわさが本当になつてきました。終戦まで家にお手伝いに来てくれていた中国人が、有りったけの材料で「まんとう」や「チェンピン」を作ってお別れに来てくれました。戦後になると、街の中国人からは石を投げられたり、露天でからかわれたり、随分不快な思いをさせられました。この人のように心優

しい人もいるのだと大変心が和みました。

大連地区からの引揚げに関する説明会がありました。説明会に出席した母の手帳に、次のようなことが書き残されてありました。

「引揚げに関する予定及び注意事項

一、日労（日本労働組合）としては、相当の決意をもって、ソ連当局、中国政府と接衝し、越冬に際し主食品入手について絶対的保障なき限り日本人の引揚げを容認されたと、再三再四に互る交渉の結果、二十三日十一時、委員長に対して、旅大地区日本人引き揚げを決定する旨の発表あり。司令部、市政府、公安総局より、それぞれ二十五、六日中に正式発表がある由。引揚げはどこまでも日本再建の活動部隊として引き揚げられるものである。

二、引揚げに関しては日労に委任され、ソ連、中国側はこれが相談に応ず。

三、引揚げは十一日より来春まで（約六カ月）。引揚げ範囲は希望者のみ。残留者の生活は保証し且つ良好となす。

四、引揚船は、三日に一回出船し、月に約四万六千人乃至五万人輸送の予定

五、引揚げ順序

イ 避難民

ロ 失業者及び生活困窮者

ハ 店舗なき小売業者、労役者

ニ 一般

引揚げに際しては日労より二週間分の食糧を手交する。ソ連は技術者、熟練工は可及的に残留を希望している。

六、持帰金は後日決定するが、貴金属及び寶石類は持ち帰りを禁ず。

七、荷物は一人当たり百キログラム。貴重品は許可せず。但し、荷物は調査を要す。

八、引揚げに際し、家屋の破壊は絶対に不可。これを敢えて爲したる者は、銃殺の極刑に処す。

九、引揚特別委員会の組織

イ 総務委員会 ダンロップ少尉、陳副市長、

孫公安局長、土岐委員長

ロ 経済委員会 ブロツチン大尉、徐憲正、

石堂事務局長

ハ 保健委員会 ゲルハノフ中佐、竹沢医師

ニ 情報委員会 ダーキン少佐、朱秀心、

野々村教育文化部長

引揚げ発表と同時に、売物の値段暴落の虞^{おそれ}あり、
購買委員会に依り買収する計画あり。

十、地区組織（以下省略）

一

昭和二十一年十二月、やっと日本からの引揚船
が迎えに来ました。しばらくの間、大連埠頭の収
容所で過ごした後、「弥彦丸」という貨物船で大連
港を出発したのが、昭和二十二年一月一日でした。

リュックサック一個という制限の中で、写真と
父の書いたものだけは、小さくして皆で分担して
持ちました。これらは、見付かると没収ですから、
洋服のいろいろな所に縫い付けたりして工夫しま
した。リュックサックも靴も全部手作りで、母や
姉の苦勞を本当に有り難いと思いました。こんな

状況の中で、一人一人の持ち物にそれぞれ花の刺
繡をしてくれました。

三千トン級の船に六千人の人と荷物が乗ったの
で、一人の占める席はようやく横になれる程度で、
母と次姉は夜も座ったままでした。食事は、鯖の
入ったおじやがバケツで運ばれました。「飯 上
げ！」の掛け声で配られる一杯のおじやが本当に
おいしかったこと、長い間お米を口にしていなか
ったのですから。

私の家族と長姉の家族は、旧軍人の家族や開拓
団の少年たちと一緒にになり、A十一団の一班一組
で姉の百合が班長でした。乗船のときは、日労の
人々が指揮をとって「赤旗の歌」などを合唱させ
られました。後に役員改選があり新役員に変わ
ってからは、みんなを元気づけるために演芸会な
ども開かれるようになりました。歌は戦前・戦中
の歌謡曲が主で、子供の私にはなじみの薄いもの
が多かったのですが、「誰か故郷を思わざる」とい
う歌だけは覚えています。一回の演芸会で、この

歌が何度も歌われるのは、よほどみんなが望郷の思いにかられていたからでしょう。

母は、開拓団の少年たちが零下の気温のもとで、手袋も靴下もなくやせ細っている姿を見るに見兼ねて、持っていた衣類や食べ物を分けてあげました。それで少年たちとはすっかり仲良しになり、移動のときなどは随分助けられました。

船旅は、九州に着くまではずか五日でしたが、その後に伝染病患者が発生し上陸を差し止められ、てしまい船中生活は四十日にも及びました。その間にいろいろな事を見聞きしたことを、今でも鮮明に思い出します。

(一)北満から歩いて大連までたどり着いたという開拓団の青年二人が、栄養失調と疲労のために祖国を目の前にして力尽きて死亡し、毛布に包まれて水葬されました。その毛布には、蜜柑を二つずつ入れました。スクリューにからまぬように船は大きく一回転しましたが、人の死とその扱いを甲板でじっと見ながら、十二歳の私

はただただ途方に暮れてしまい、悲しいばかりでした。

(二)戦地での上官と部下だった人の再会により起きた悲劇。戦地で何があったのかは分かりませんが、船内での夜中に部下だった人が元の上官にリンチを加え、その上官は顔が紫色に腫れ上がってしまい、見るのもつらく、何と悲しく恐ろしいことと思いました。

(三)四、五歳の男の子と、生まれたばかりの赤子を抱えた元陸軍中尉の奥さんで上品な人でしたが、母乳が全く出なく、おじやを口にかけていくが受け付けません。母もそつと励ましましたが、奥さんは声もなく、ただ赤子を抱きしめるだけでした。日ごとに死に向かっていく姿が、痛ましいことでした。上陸後、赤子死亡の手紙を受けた母は、深く悲しんでいました。

(四)片足が半分腐っている人でしたが、傷口には蛆がわいても痛みを訴える力もなく、船医が黙々としてピンセットで一匹ずつつまみ出して

いました。

(五)夜中に急に点呼がありました。H団の人が二人海中に飛び込んだことでしたが、そのうちの一人は、栄彦丸に泳ぎついて本船に送り返されて来ました。もう一人は、すぐに本船に救い上げられました。原因は、持ち物検査を恐れられたためと伝えられていました。

(六)私たちの集団であるA十一団の二人が、編上靴を持つて船員室に行き、食糧との交換を申し込むということがあります。船員は食事を与えて帰らせましたが、その途中で船の食糧を盗んだことが見付けられた事実が浮上し、みんなの食糧を盗んだということから団員一同の怒り呼び、いきり立った人からは、「海に投げ込もうか？」という極端な意見や、帆柱に縛りつけるか、官憲に突き出そうかとか、いろいろな意見が出ていたそうです。この事件について、母は「これら若者のなせること、罪は罪なれど隠れてこれ以上の悪事をなせる人無きや？」と

手帳に認めていました。結局、この人たちも無事に上陸できたのでほっとしました。

(七)夫を北満に送った長姉は、夫が無事に帰って来たときに着せようと、各季節の一番上等な服を行季に入れて、大事にここまで持つて来ましたが、ある朝、すっかり空になった行季だけが海の上に浮いていました。

(八)疫病患者発生のために、約一カ月港に止められました。みんな虱だらけで、形だけ風呂に入られ脱いだ服は、消毒でビシヨビシヨにされて、風邪をひくので服を抱えて風呂場を素通りするというもありました。

(九)佐世保の港外に止められている間に、亡くなった人も多数あつて、その亡骸が小船で陸に運ばれる悲しい目を何回もしました。

(十)しかし、悲しく悲惨なことばかりではありませんでした。東北弁の兵隊さんの奥さんが、船内で無事に出産しました。これは唯一の喜び事でした。

昭和二十二年二月十日、やっと上陸ができました。本船から小船に乗り移り、佐世保港の岸壁から日本の土を初めて踏みました。それから薄汚れた汽車に乗り東京へ。道中一面の焼野原の景色が続き、これが夢にまで見た祖国の現実かと、啞然としながら眺めたことを覚えています。

最初は父の故郷秋田に行くつもりでしたが、なぜか東京に変更されました。そのことは、当時東大在学中の兄久満と引揚船の母との往復書簡に記されています。

母より兄への便り

「終戦以来、一年有半も知る人も無き東京の地でただ一人、いかに辛苦の日を送られたことでしょう。遠く海を隔てた大陸の地で、ときおり見る貴方の夢、相見る日はいつのときかと思っっていましたところ、幸いにもこのたび六千人の先発隊に加えられて、今朝一時に無事佐世保に入港致しました。当地では、ここ数日收容所にて過ごすらしく、その後は東北班として多分新潟經由で本籍地

に向かうようです。佐世保出發の日、または能代到着時に打電します。私共もひとまず能代に行き、家も広いのでしばらくは藤島様のお宅に泊めてもらうつもりです。所持金は一人当たりの定額だけは持っていますから、貴方はお金の工面をして能代までおいで下さい。今後のことについても、いろいろ相談したいと思います。

佐世保には入港致しましたが、上陸は後日になるでしょう。汽車は一日に三千人ぐらいしか乗れないらしく、何万という引揚者が待っているので、順番待ちをしなければなりません。今も、台湾やシベリアなどからの引揚船が続々と入港して来ました。

語っても、語っても語り尽くせぬ話、いずれ能代で致しましょう」

兄から母への便り

「お便り誠に有り難うございました。全員無事帰還、何よりと喜んでいきます。終戦から今日まで

本当にご苦勞様でした。ところで、行く先を能代としていたようですが、直ちに東京に変更して下さい。というのは、秋田に家も土地も持たない我が家が、これから他人様に迷惑をかけずに生きていくためには、東京の方が都合だと思つたのです。家の準備ぐらいいはしておきたいと思つたのですが、力足らずで目下一軒家に住んではおりませんが、事情があつてこの家にお迎えすることはできません。

幸いに、創立当初より昨年三月まで、在外父兄救出学生同盟の一員として働いていましたので、同盟には友人も多く、いろいろ情報も得ています。目下、東京には引揚者の無料宿泊所があちらこちらにあります、中でも上野の淨明院は私の親友が住み込みで世話をしていますので、こちらに頼んで面倒をみてもらおうと思つています。どうか元氣を出して東京へおいで下さい。

能代の方には、昨年五月に行つて父上の親戚にはほとんど顔を出していませんし、この正月にもい

ろいろと世話になつてきました。こちらに来て落ち着けば、みんな一度遊びに行かれたらよろしいでしょう。

伯父さんは、大森の家を空襲で失い、今は田舎に戻つております。後でゆっくりお手紙を出して結構ですが、お急ぎの用があるかもしれないと思ひ、現住所を書き添えました。高円寺の小母さんは相変わらず元氣で、元の所に住んでいます。以上の方々には私より連絡しましたので、帰国したことは知つてはいます。では、どうかお元氣でお帰り下さい。お待ちしています。」

ごつた返す鶯谷の駅に降りました。「引揚者の皆さん！ ご苦勞様でした！」とメガホンで叫ぶ中、迎えてくれた兄や学生たちの顔が忘れられませんでした。

二月半ば、兄の案内で淨明院の引揚者收容所に入り、生活が始まりました。要領の良い郁子姉は、早速秋葉原のパン屋に職を見付け、パンの耳や焼き芋の皮を、私や弟に持ち帰ってくれました。電

気を消して周りの人たちに気兼ねしながら、喜んで食べたことは悲しくも懐かしい思い出です。

外食券が一人一回十八円分が支給されて、近くの食堂にご飯と味噌汁を取りに行く毎日でした。

「たった一つのお碗で、始めはご飯、そのあと味噌汁を飲んでいるの」と食堂の小母さんに話すと、大笑いされました。

私は約一カ月、ここから根岸小学校に通い卒業証書をもたらしました。初めて東京の学校の給食で、缶詰の鮭の入ったシチューを口にしたときの感激は、特別でした。

三月いっぱい目黒の雅叙園に移されて、数千人の引揚者仲間と一緒に生活が始まりました。天井には美しい天女が舞っている絵があつて夢のようでしたが、一方、薄暗い地下室の炊事場で、これ以上は薄められないほどに薄めたおじやを作つて食べている現実とのギャップは、子供にも何かおかしくて仕方がなく思いました。

姉たちは職探しに奔走していましたが、兄は盲

腸の手術がこじれて一カ月入院し、その間母は付き添いのため不在となり、長姉はリニューマチでその子二人は麻疹はしか、私が家中の世話係となりました。

三カ月の雅叙園での生活を経て、いよいよ仮設住宅へ移転しました。場所は江東区の東川住宅。

ここは、昭和二十年三月十日の東京大空襲で全焼し、コンクリートの殻だけになってしまった小学校を改造したのですが、リュックサックなどを並べて仕切った今までの生活と違い、やっと家族だけの生活に戻れたという安心感がありました。

しかし、一教室を三等分してベニヤ板で区切つたという代物でしたから、〇〇さんの所から南京虫が出たといううわさがたつと、間もなく我が家にもやって来るという有様で、明るいうちはどこかに隠れていて、夜になると人の血を吸いに寄つて来るのです。痒くて寝られない日が続きました。乾燥した柱の割れ目に潜んでいたのです。DDTの粉を擦り込むと苦し紛れに出て来るので、それを見付けては全部つぶして退治しました。

六畳と二畳、それに一間の押し入れでは、無料宿泊所よりはましと言えるものの、到底十分とはいえませんので、近所の復員兵の大工さんに頼んで中二階を作ってもらいました。私たちの寝室兼勉強部屋でした。

炊事は、廊下にあった五、六個の水道栓のついた共同の流し台で、そこで洗濯も一緒でした。各家とも、戸口の前の廊下で拾ってきた枝木を使って七輪で煮炊きをしていましたが、甘藷入りの玉蜀黍のおかゆが常食でした。

トイレというよりも、「共同便所」という言葉の方がピッタリする建物が、外に作られていました。夜中に人の呻き声が聞こえるとき、女のすすり泣きの声が聞こえるとき、いろいろなわさが流れていましたが、私は聞いたことはありませんでした。男女共同の便所でしたが、のぞき、痴漢などの騒ぎも一切ありませんでした。

後年、キティ台風で水害に見舞われたとき、戦争中の空襲によってこの学校で亡くなった方々の

頭蓋骨がたくさん浮いてきたので、校庭で改めて慰霊祭が行われました。東京大空襲で火だるまになった布団が飛んできて、顔と両手を焼いてしまった私の親友の傷跡は、今なお痛々しく残っています。プールは死体でいっぱいだったと、別の級友は泳ぎながら教えてくれました。

このような環境の中で、新制中学校の第一期生としての生活が始まりました。教科書も授業も民主主義の強調ばかりで、戦争のことにはほとんど触れられませんでした。私は下駄履きで、アメリカからの救援物資の派手な青色のショートパンツを、恥ずかしいけれども仕方なく履いていました。そのころになると小麦粉、玉蜀黍粉、脂肪粉乳など忘れられない救援食糧です。

暮らしは貧乏でも、中学校での教師と生徒の間には心の通じ合うものがあり、お祭りの夜などは遅くまで踊り、楽しみ、そして励まし合っていました。

東川住宅に移った翌年に、我が家に戦後初めて

の不幸が訪れました。長姉の子、佳子の死です。大連の漁網工廠の託児所にいたころ、やや得意気に「オナーカガスイター。モットチョーダイ」と連発していた子です。最初、歩き方がややおかしいので診察を受けたところ、脊髄カリエスと診断されてギブスをはめられていましたが、やがて結核と分かったときは既に手遅れでした。「沈む！沈む！上げて！…」と、か細い声で母親に訴えながら息を引取りました。大好きなビーナツの小袋を、小さな手に握りしめて旅立った姿は、中学生の私には耐え難い悲しみでした。

翌日、みんなに見送られて砂町の火葬場に運ばれて行きましたが、見送る人々の中から「大きな声では言えないけれども、佳子ちゃんは本当に親孝行ですよ」とささやく声が聞こえました。また別の人からは、「お父さんが寂しくて呼んだんだよ」という声も聞きました。そのときにはまだ安否が分からない義兄なにと、少し腹が立ちました。間もなくして戦病死の公報が入りました。

義兄の島田三郎は、大連一中の英語の教師でしたが、昭和二十年五月に召集令状を受け、北満で終戦を迎え、そのままソ連のブラゴエシチェンスクに抑留、そこで凍傷のため無念の死を遂げたということでした。公報に添えてあった印鑑と爪だけが、姉の元に帰ってきたのでした。

佳子を亡くし戦争未亡人になった姉は、長男の秀雄を連れて江東区のベタニヤホームという女子寮に入居し、近くの材木会社の事務員として働きました。大連一中で義兄の友人だった、新宿高校の沢正雄教諭（後、桜美林大学教授）が、常に力添えをして下さいました。後年、秀雄は上智大学を卒業、老人福祉の仕事に徹し、三人の男の子の父となりました。

数個のリュックサックに布団袋一つというほとんど無一物に近い我が家が、二、三年のうちに何とか立ち上がることができたのは、家族全員の力はもちろんですが、何といっても子を守り育てることに生き甲斐を持っていた、母のお陰です。母

は見栄も外聞も体裁も省みず、錦糸町の駅前露天で、進駐軍放出の石けん、チョコレート、キャンデー、タバコなどを売りました。薄利多売をモットーにし、親切丁寧で人を差別しない母の人柄は、多くの人を集める結果となり、店は繁盛しました。

しかし、この店もやがて区画整理の対象となり取り払われ、少し南に離れた新築の飲食店街に移るように勧められました。母は、役所勤めの姉たちと、会社勤めを始めた兄の収入で何とかやっていけると判断したのでしょうか、移転の話をきっぱりと断り、未練なく鑑札を返納しました。

昭和二十七年正月、我が家は中野に新しくできた都営住宅に、四トントラックいっぱい荷を積んで引越しました。私は新制高校二年生、弟は新制中学三年生でした。

物心のついたころから戦争の渦の中、そして戦後の苦勞、やっとなんとした実感を手にしました。それから五年後、母の還暦を、倍になった家族で

祝うことができました。

国策による渡満者の終戦時の邦人数は、百九十五万人とか。第二次世界大戦による死者十七万六千人と聞いています。その中のたった一つの家族の傷でさえ、癒し難いのです。どうか、こんなことを決して繰り返さないでと心から願い、世界の平和を切に祈るものです。